
金髪巨乳はお嫌いですか？

晴丸

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

金髪巨乳はお嫌いですか？

【Nコード】

N9220Z

【作者名】

晴丸

【あらすじ】

金髪巨乳の美少女と、どこにでもいる少年のお話。

本作は第1回GA文庫短篇部門に投稿したものを改稿したものです。

駅前のロータリーに謎の少女がいた。

高校一年の三月、明日から春休み　つまり今日は今年度の終了式。僕はいつものように学校の最寄り駅の駐輪場に自転車を止めて、学校行きのバスへ乗るため駅前のロータリーへと向かった。

そこに謎の少女がいた。

正確には少女ではなく、美少女で。謎の、というか外国人の女の子なんだけど。

おへそが見えるくらいの丈の、胸元が強調されたタンクトップに、膝丈のデニム。背中にしょっているリュックサックはこっぴんだけど、それがまた外国人らしさを出していた。

そんな金髪美少女が駅前のロータリーにいたのだ。

朝の通勤、通学ラッシュの波の中で彼女の姿は浮いていた。彼女の周りだけ人がいないせいもあるだろう。道を尋ねたいのだろうか、彼女は通りかかる人に話しかけようとしているが、みんな無視を決込んで足早に通り過ぎていく。

しかし、みんな彼女のことは意識していて、僕と同様にバスに乗る人や駅の改札から出てきた人たちは、ごった返す人ごみの中、ぽっかりと空いた空間にいる彼女のことをじっと見つめていた。しかし決して足を止めることなく進んでいく。

みんなが足早に通り過ぎるなか、僕はただひとり立ち止まって彼女のことをじっと見つめていた。

……正確に言うのなら、僕が見つめていたのは彼女の身体の一部……胸元、つまり、おっぱいだ。僕は彼女のおっぱいを食い入るように見つめていた。

ソレは、衝撃だった。

胸元が強調されたタンクトップ、といったがそれは間違いだった。彼女の圧倒的な胸がタンクトップを押し上げて、さらに、柔らかいであろうソレがむにゅっとはみ出していて、そんな風に見えてしまったのだ。

そして、二つの突き出したソレはみごとなブラックホールを形成していた。

そのブラックホールを人類は谷間、と呼ぶかもしれない。

しかし否。否、否、否！

あれは谷間、なんて言葉に収まりきるものでは到底ない。彼女が動くたびに小ささまざまに形を変え、見るものすべての視線をいざなうソレは、抗いがたい吸引力でぼくらの視線だけでは飽き足らず、手や頭までも吸い込もうとするのだ！……吸い込まれてしまったら最後、冷たい檻の中へと収容されこちらへと戻ってくることは出来ない。

いや、なんとも恐ろしい！ 恐ろしい！

だが、だからこそ、ブラックホール。

いや、すばらしいおっぱいは凶器になりえるんだな、とかバカみたいなことをしみじみと僕は思っていた。

彼女の凶器に、おれ狂気、なんつって。

そんなくだらないギャグを思いついて一人で「さむいなあ」と肩をすくめていた。もちろん、視線は彼女のおっぱいに固定したまま。朝からいいもの拝ませてもらったなあ。そろそろ行くか。

そう思いつつも、視線は彼女のおっぱいに釘付けのまま歩き出そうとした瞬間　バチリ。

彼女と、目があってしまった。音がした気がするくらいしつかりと。

「……………」

ああ、これはやばいな。と思った。

このままじゃ、僕はきつと彼女に話しかけられる。話しかけられても英会話なんて出来やしない。学校の授業で英語をやっていると

つても、あんなもの実際の会話ではまったく役に立たないことぐらい、十分に知っている。

空欄補充や記号選択なら出来ても、英作文や英会話は出来ないのが日本の高校生の実情……少なくとも僕はそうであることは間違いない。

うん、逃げよう。

別に外国人の美少女に話しかけられるぐらいいいじゃないか、と思うかもしれないけど、僕はよろしくなかった。

だって怖いじゃん。なんか。

よくわからないけどさ、英語とか、そうじゃなくて他の知らない言葉で話されるのってなんだか怖い。

それが未知のモノへの本能的恐怖と呼ばれるものなのか、つたない英語で話して恥をかくことへの恐れなのか、いい加減なことを言って相手を困らせるかもしれないといったことへの不安なのか。あるいはぜんぜん違うほかの何かなのか、それともその全てなのか。それはわからないけど、とにかくそういった種類のものを僕は感じていた。

だいたい、へたれの僕は日本人に道を聞かれたって逃げる。いわゆる外国人をや、だ。

よし、逃げよう。

一步を踏み出して去ろうとした瞬間、

「……う」

僕は動くことが出来なかった。

僕が立ち去ろうとしたとき、彼女はすでにこちらに向かって歩いてきていて。やっと立ち止まった人だったからか、彼女は小走りの前傾姿勢で急いでこちらに来ていて。それがいけなかった。

揺れるのだ。おっぱいが。

僕が立ち止まる原因となった凶器が、彼女が歩くたびに揺れた。前傾姿勢の小走りで歩くために、ブラックホールはうにやうにやと形や大きさを変え、その奥にある、世界の真理を僕に見せようと

する。

僕は目を離せなかった。彼女のブラックホールの先には人類待望の世界の真理がある。それを手にすれば、この世界に満ちた数限りない争いはきつとなくなるのだと思った。そうに違いないと確信した。ああ、それなのにどうして目を離すことが出来ようか。僕が見れば、世界は平和になるんだ。

世界平和はおっぱいの奥にある。

僕は見つめた、世界のために。一步一步、歩きたびに形を変えるブラックホールを。飲み込まれそうになる自我を必死に保ち、その奥底の真理を覗き込もうと、目をぐわつと見開いて血走った眼で焦がすほどの熱意を込めて、僕は見つめた。

ブラックホールは徐々に、だが確実に大きさを増し、僕のもとへと近づいてくる。世界の真理も僕へと近づいてくる。しかし、ブラックホールの闇は想像以上に暗く深く、世界の光全てを奪い、真理をその中に飲み込み、誰にも見ることが出来ないようにしている。近づけば近づくほど、僕は真理が遠ざかっていくような錯覚に襲われた。

だが、あきらめない。僕は、あきらめない。

世界のために！ みんなのために！僕は、なんとしても見る！
ついにブラックホールが僕の眼前へと迫った。ブルン、と大きくたわんだ瞬間、その奥の真理にまで光が差し込み、
見え

「Excuse me？」

その瞬間、見えそうだった真理は掻き消えた。ブラックホールという幻想もどこかへ消し飛んだ。

彼女が、僕に話しかけてきたのだ。おっぱいに目を奪われて、僕は逃げる機会を失った……馬鹿だと思う。自分でもさっきまでの頭の悪い思考が自分のモノだと思うとやりきれない思いだ。

「……Excuse me？」

不安そうな顔で彼女は僕のことを見上げた。いわゆる上目遣い。ドキッと胸がはねた。外国人特有の近い距離感。

「あ、ああ。はい、はいはい。イエスイエス。オーケーオーケー」
金髪美少女の上目遣いなんて非常事態にドキッとしながら、日本人離れたすつと通った鼻梁や長いまつげに、うわー日本人じゃねえ、と当たり前のことを感じ、あせった僕はとりあえず顔を縦に振ってイエス、オーケーと答えていた。

おっぱいを見ていたことへの罪悪感とか、距離が近くておっぱいがぶつかりそうで、それにちよつと期待をしまっている部分もないとはいえないけど、決してそれだけでもなくて、困っているひとに話しかけて無視するというのができない典型的な日本人である僕。

「Oh, Thank you! I want to go to this picture's place. Do you know there？」

そんな僕に彼女は、そう言いながら、一枚の写真を見せた。そこにはどこかの神社の境内と大きな桜の木、その横に立つ白髪の日本人男性と彼に抱きつく金髪の少女が写っていた。満開の桜が散る中で撮られた、懐かしい感じのする色あせた写真。

僕には彼女がなんて言ったのか、聞き取ることは出来なかった。おっぱいに気をとられていたからじゃなくて、単純に英語力がないからだ。聞き取れたのは「センキュー、デイスプレイス」ぐらい。でもまあ、なんとなくわかる。彼女は身振り手振りを交えてくれているし。

「Do, you, speak, English？」

僕の様子から、たぶん聞き取れていないことがわかったんだろう。彼女はゆつくりとそう言った。うん、これぐらいなら聞き取れるしわかる。「英語が出来ますか？」ってことだろう。たぶん。

「A little」

少しだけ 親指と人差し指で小さな隙間を作って見せながらそう言った。

「OK」

彼女はそう言って笑ってくれた。ちゃんと伝わったみたいだ。僕の英語力もなかなかじゃないか。そんな風に悦に浸る僕に、彼女はゆっくりと話した。

「Do, you, know, there?」

写真を指差しながらそう言った。

わかるよ。ちゃんとわかる。彼女はこの写真の場所を知っているか、と聞いているのだ。うん、よくわかった。僕はうんうん、と大きくうなずいた。英語なんてたいしたことないじゃないか！ フハハハハ！

「Oh! Really!? Wow!」

むぎゅ。

「え?」

突然、彼女が僕におっぱいを押し付けた。いや、違う。正しくは彼女が僕に突然抱きついてきたのだ。

「わ、わ、わっ!?!」

事態を知った僕は変な声を上げた。彼女のおっぱいが僕の胸からみぞおちにかけてもにゅもにゅとぶつかってきて、そのやわらかさで、わけがわからなくなる。

「How lucky!」

そう叫ぶと、彼女は抱きついていていた身体を離して、僕の手を両手で包み込んで胸元に引き寄せた。

「うぁ!?!」

彼女の手のひら越しにやわらかいおっぱいの感触がわかるようなわからないような、いやこれは彼女の手のひらのやわらかさかなやっぱり。混乱する僕に彼女は目を輝かせて、興奮していった。

「Please, Please take me there!」

突然手を握られたことに驚いたり、早口だったりで聞き取れやし

なかったけど、「さわってください」っていわれた気がする。

早鐘を打つ鼓動を押さえつけ、もんでいいのかな？ 言ったよね？ きつと……と早とちりしそうな気持ちを押さえ込んで、落ち着いて考えた。

どうして彼女は突然、こんなことを？ まさか一瞬で俺に惚れた？
なんてことはありえない。落ち着いて考えろ。今の会話を思い出せ。

彼女が「この場所知ってる？」と言ったのが僕には理解できた。
だからうなずいた。

……………。

アレだ。これは不幸な行き違いというやつじゃないかな？ うん。
彼女は僕がうなずいたのを、場所を知っている、という風に受け取ったのだろう。それで、場所を知っている僕に、連れて行ってく
ださいと、たぶんそんなところ。

これは……まずい。彼女は目をきらきら光らせてまるでヒーロー
に恋するヒロインみたいな瞳で僕を見つめているけど……僕はその
場所を知らない。

写真に懐かしい感覚を抱いたと言っても、よくある日本の春の風景、
みたいなもので、はつきりとどこか知っているわけじゃない。
大半の日本人が抱くであろう感想だ。

もちろん、この駅前で聞いて回っているのだから、この近辺なん
だろう。だから、見たことや行ったことがある気もする。でも、気
がするだけで本当はないかもしれない。そのぐらいあやふやな感覚
だ。

一体これをなんて説明したらいいんだ？ こんなに微妙な気持ち、
日本語以外で説明なんか出来ない。日本語ですら、確実に相手に伝
える自信はないのに。

「……ああ、ええと……アイハフトウーゴートウースクール……」
どうしようもなく僕は、苦し紛れにそう言った。これから学校
に行かなきゃならないんだ、と。腕時計を指して、ノータイム、と

かソーリーとか。もう文法も何もない、苦し紛れの単語の羅列。ひどいいいわけだ。

僕がそう言った瞬間、彼女はすごく落ち込んだ。目に見えてはつきりとわかるぐらい表情が暗くなった。

「……ah, umm, Could you tell me where the place is?」

すぎるような目で彼女は僕を見た。場所だけでも教えてくれませんか、とかきつとそういうことを言ったんだと思う。でも、僕には答えられない。

「……アムソーリー、アイキャント」

「……Ok. Sorry. Thank you」

彼女は僕の言葉に落胆した。気丈にも微笑みながらセンキューと言ってくれたが、今にも泣き出しそうだった。

「……ソーリー」

それ以上彼女を見ていることは出来なかったので、僕は背中を向けて歩き出した。

一瞬だけ、彼女が僕を呼び止めようとしたのが気配でわかったけど、立ち止まらずに歩き続けた。

僕はそのまま学校行きのバスに乗り込んだ。

時間がないと言ったのはうそではない。学校行きのバスが出るまであと数分しかなかった。それは本当だ。このバスを逃したら遅刻だった。そうだ、仕方が無かったんだ。

バスのドアが閉まり、アナウンスが発車を告げる。窓からロータリーを見ると、彼女がベンチに座ってうつむいているのが見えた。

……仕方が無い。僕は悪くない。どうしようもなかった。

僕が自分にそう言い聞かせる中、バスは発車した。

満員のバスの中、僕は彼女のことを考えていた。仕方が無かった、と言いつつ、そう思わない自分がいた。

……彼女はなんであの写真の場所を探しているんだろう。言葉も通じない土地で。通訳もなしに。言葉の通じない外国にまでくるんだから、きつとよっぽどの事情があったのだろう。

……言葉が通じないことへの不安とか、外国人は感じないのかな？日本人は間違えることを怖がるけど、外国人は怖がらないとテレビや本で何度か聞いたことがある。なら、言葉が通じなくても不安に思ったりはしないのかな？外国人ってなんかみんなポジティブぽいし。

外国人だから不安は感じない　そんなわけがないのはわかっていた。

言葉も通じない見ず知らずの土地で、写真の場所を探す。一生懸命声を上げて、誰も立ち止まってくれない。みんなが自分を避けていく。

不安になるさ、泣きたくもなるさ、見ていたもの。ベンチに座っていた彼女の肩が震えていたことだって、見えていた。そう、見えていたんだ。

彼女は僕なんかとは比べ物にならないくらい怖かっただろう。不安だったろう。

だから、僕が立ち止まったときに駆け足だったのだ。僕がうなずいたときに抱きついて喜んだのだ。胸がぶつかることも気にしないで抱きついて、手を握ったのだ。

そのときの彼女の顔がよみがえる。

思わずドキツとして、抱きしめなくなるぐらいのとびきりの笑顔だった。

「しょうがない、学校あるし」
そう自分に言い聞かせる。

日本人は、理由がないと動けない、ということを知ったことがある。例えば、道で困っている人がいたとき「助けてあげたいな」とはたいていの人が思うのだけど、きっかけがなくてそのまま素通りしてしまうというのだ。でも反対に、忙しいときでも「助けてくだ

さい」と言われれば、手を貸さずにはいられない。それが日本人。僕は、そんな典型的な日本人だった。理由がなければ動けないけど、理由があれば、動ける。

だから「学校」という理由があるから僕はあの場を去ったのだ。そして、彼女を助ける理由はなくなったのだ。

ズキン、と胸が痛んだ。

僕はもしかしたら病気なのかもしれないと唐突に思った。

そうだ　僕は……おっぱい病なのだ。この病気はすばらしいおっぱいから遠ざかると、胸が痛くなってとても耐えられなくなるといふ危険な病だ。

抱きつかれた瞬間に味わったおっぱいの感触が、きっと発病の引き金になったのだ。

病気の治療法はひとつ　すばらしいおっぱいのそばにすることそれしかない　日本人とはなんて面倒なんだろう。こないいいわけをしないと動けないなんて。

「すいません！　降ります！」

バスの降車ボタンを押して、僕は叫んだ。

二つ目のバス停で降りた僕は、駅に向かって全力で走った。

「はぁ……はぁ……はぁ……」

僕が駅前へと戻ったとき、彼女はまださっきのベンチに座ってうつむいたままだった。

……どうしよう。まいったな。なんて声かけたらいいのかわからない。

彼女の落ち込みようは近くで見るといつそう強くて、その原因になった張本人がどの面下げて戻れるのだ、という雰囲気だった。

時間稼ぎと、走った渴きを癒すため、とりあえず、自販機でスロッドリンクを買い、それを飲みながら、彼女の様子をうかがう。

ラッシュを過ぎて閑散とした駅前で、ベンチの端に腰掛けてうつ

むく彼女の姿はいつそう悲しげに見えた。だけど、そんな状態でも、時折通りかかる人たちは見て見ぬ振りをして通り過ぎていく。……誰か、声ぐらいかけてやれよ。女の子が困ってるんだぜ？

自分のことを棚にあげてそう思っている僕自身に気がついたとき、気持ちは決まった。

彼女の座るベンチへと近づく。

僕が近づいても彼女はうつむいたままピクリとも動かない。いきなり声をかける勇気はなくて、同じベンチの反対側の端に腰を下ろした。

飲みかけのスポーツドリンクをチビチビと飲む。いくら飲んでものどはカラカラだった。

彼女のことを横目でうかがう。

「……………」

彼女は目を閉じて、涙をじつとこらえているように見えた。身体が時折小さく震える。その横顔はとても悲しげで

「……………」

スースー、という規則正しい彼女の息遣いが聞こえてくる。

「……………」

彼女の横顔を見つめて、僕は、はぁ、と息をついた。

……寝てるよ、この子。

彼女はスースーと規則正しい寝息を立てて、こくりこくりと船をこぎつつ、うたた寝をしているようだった。

彼女の呼吸にあわせて、豊かなおっぱいが上下する。

……こんなところでなんて無用心な子だろう。肩も丸出しのタンクトップでおへそまで見えているというのに。触られたらどうするつもりだろう？

彼女の上下するおっぱいを見つめて、僕は無意識にゴクリと生唾を飲んだ。いや、いや、いや。違う、違うよ。

とにかく早く起こしたほうがいい。こんな無防備な姿をいつまでも見せられたら僕が精神が病んでしまう。

それに、もう春で今日は暖かいとはいえ、こんな格好でいつまでも寝ていたら風邪を引く。……風邪を引く、って英語でなんて言っただけ？

「おい。プリーズ、ウェイクアップ……？」

起きてくれ、と言ったつもりなんだけど、彼女は少しも起きてはくれなかった。……風邪、風邪……ウインド？ は違うよな。

「起きて、風邪引くよ」

もう一度、今度は少し大きな声で声をかける。めんどくさくなつた僕は日本語でいいことにした。

彼女はぐずるようイヤイヤをして、少しだけ肩を動かしたけど、起きる気配はなかった。

「……………」

人が親切で起こしてあげようとするのに嫌がるなんて。……彼女は少しのことでは起きそうにない。ちょっと驚かすぐらいじゃないと起きないだろう。

僕は彼女の大きくて豊かなおっぱいを見つめ、ゴクンと生唾を飲み込んだ。心なしかさっきより唾液の量が多い気がする。

うん、起こしてあげよう。紳士的に。

いや、これは仕方ないんだよ。アレだよ、ちょっとしたお茶目だよ？ 決して犯罪になるようなアレじゃないよ。人の親切を嫌がる子へのちよつとした戒めとかだよ。軽いジョークだよ。いや、起こすために仕方が無いんだよ。起こすための……うん。まあなんかそんな感じのアレです。

僕は恐る恐る彼女へと手を伸ばす。ゆっくりと、ゆっくりと。

そして ふにつ。

「x ! ?」

彼女は何か「キヤ」みたいな悲鳴を上げ、ビクンと跳ね起きた。

彼女は何事が起きたのか、とばかりに目を見開いて、そして目の前に立つ僕を見つけると、

「Why! ?」

たぶん、驚きの声だと思う。「なんで」とか「うそ、信じられない」みたいな。彼女はそういう目で僕を見ていた。

「グッドモーニング」

呆然とする彼女に、そう言った。

「……………」

彼女はまだ少し寝ぼけているのか、ぼんやりとして答えてくれない。口元によだれがたれている。僕はもう一度、さっきと同じように手を伸ばした。

ふにっと、触れさせる。彼女のやわらかなほほに、手に持ったスポーツドリンクを。

「Hya!？」

彼女はまたも悲鳴を上げた。たぶん「冷たい!」とかそんな意味だと思うけど、聞き取れない。彼女は冷たいのを嫌がるように、僕の手からスポーツドリンクを奪い取った。

……誰だ、僕が彼女のおっぱいを触ったと思ったのは。そんなこととしないぞ。清く正しい日本男児として。寝込みの無防備なところを襲うなんて卑怯なまねは絶対にしない。あくまで愛でるだけなのだ。それがポリシー。

「……Why? Why are you here? You went to school……」

なんて言ってるのかわからないけど、多分、どうしてここにいるのか、と聞いているんだろう。スポーツドリンクを手に持った状態のまま、彼女は信じられないものを見ているような顔をしていた。

そんなことを聞かれても説明に困る。そんな難しいこと英語では言えない。いや、仮に言えたとしても恥ずかしくて言えやしない。

おっぱい病なんです、なんて、一体どうやって言うんだ？

「んー、何だ。そのピクチャープレイス……探す、ってええと……ルックフォーウィズユー」

身振り手振りを最大限に活かして「一緒にその場所を探すよ」と、なんとか伝えようとする。

「Ah , Would you help me ?」

「イエス、イエス」

手伝ってくれるの？ 僕の言いたいことが伝わったみたいで、彼女はそう聞き返してきた。それにブンブン首を縦に振ってうなずく。彼女は小さく、信じられない、まさか、というようなことをつぶやいて、小さく首を横にふった。

「アイ、ヘルプ、ユー」

ぐいっと親指を立てて笑って見せた。ウインクも決めて、齒がキラツと効果音を立ててきらめきくようなイメージの笑顔を。

彼女は感極まったように「Aa , ah ……」とつぶやいて。

ぐいつ、むぎゅ。チュツ。

「Thank you ! thank you ! thank you very much !」

僕に抱きつくと、ほほにキスをした。

とても強く抱きしめられておっぱいがむにゅむにゅとつぶれていた。しかし、残念なことに僕はそのときの感触をまったく覚えていない。

ほっぺたにされたキスの感触で、頭が朦朧としていた。唇のやわらかさとおっぱいのやわらかさのダブルパンチで今にも昇天しそうな僕に、彼女は笑顔で言った

「わたしは、Sophia・Rowlands です。ソフィって呼んでください」

流暢な日本語で。

「……は？」

2

「へー、あー、そうなんだ。おじいちゃんが日本人なんだ。それで、

日本語ぺらぺら……そ、そっか」

ソフィと呼んでください、そう言った彼女は自分がどうして日本語を話せるのかを、教えてくれた。なんでも、彼女はおじいさんが日本人のクワォーターで、日本語はそのおじいさんから教わったそう。彼女自身は生まれも育ちもアメリカで、日本に来るのは今回が二度目だとか。

そっか、ハ、ハハハ……彼女の隣に座った僕はそんな乾いた笑いを漏らしていた。

いや、だってさ、あんなにつたない英語で話しかけてさ……相手は日本語もわかってたからこそ僕のアんな英語が通じたってことで、あたふたかつこ悪く、つたない英語を話していた自分がバカみただ。最初から日本語で話してくれれば、あんな勘違いも起こらなかったのに。

「……ごめんなさい」

「へ？」

意味がわかってないからこそ適当にしゃべれた言葉が実は理解されていたとわかって恥ずかしく思う僕に、彼女は頭を下げた。その拍子にタンクトップの胸元がゆるみ　うお、み、見えそうだし……奥の奥まで、見えそうだし！

「試すような真似をしてしまって……」

彼女が頭を上げるのにあわせて、僕も覗き込もうとして傾きかけた身体を元に戻す。……ごめんなさいは僕の方です。ごめんなさい。「最初から日本語だと、変な人に絡まれるって。英語なら、英語が出来るお人よし、英語も出来ないよっぽどのお人よし、まれな変態だけしか話しを聞かないからと、日本人の友達が……」

そう言っただけで彼女はにっこり微笑んだ。……僕はその三つのどれに分類されているのだろう？……変態、じゃないよ……ね？

「でも、英語だと本当に誰も話しを聞いてくれなくて……だからあなたがいってくれて本当によかった」

えーと、と彼女は少し考えるようにして言った。

「あなたは、すばらしいお人よしです」

につこりと笑ってうれしそうに言ってくれた……お人よしって言葉がほめ言葉ではないことはその笑顔に免じて黙っておこう。

うんうん、と渋い顔でうなずいた僕に彼女は聞いた。

「あなたの名前を教えてくださいただけますか？」

「ああ、オレは、いまい・しゅうち今井周一」

シュウイチ、とつぶやいた彼女は、顔をぱつと明るくした。

「シュウ……私のおじいちゃんと同じ名前！」

「おじいさんもシュウイチなんだ？」

「はい、おじいちゃんの名前はシュウゾウでした」

それは日本では同じとは言わないよ……そう思う僕に、これがそのおじいちゃんです、そう言っただけで彼女はさっきの写真を取りだし僕に手渡した。この白髪の日本人男性がそうなのだろう。歳をとっているが、背筋はピンとして、スマートな体型。ジャケットにジーンズ姿のかっこいいおじいちゃんだ。

「かっこいいおじいちゃんだね。こっちはきみ？」

彼に抱きつく金髪の少女を指して僕は聞いた。

「ええ、そうです。小さいころに、おじいちゃんと二人で、日本に来て、そのときに撮った写真なんです」

彼女はそう言うと、懐かしむように僕の手の上に置かれた写真の自分とおじいさんを指でなぞった。そのしぐさはとても色っぽく、ドキツとした。

「……この場所を探してるんだよね？」

「ええ」

彼女はそこで僕を見上げて聞いた。

「この場所を、思い出せませんか？ 私は、小さかったので覚えていなくて」

ああ、そうだった。彼女は僕がこの写真の場所を知っていると思っているのだ。……謝らないとな。彼女に写真を返して僕は、思い切っと言った。

「……ごめん！ オレ、その場所わからないんだ。さっきうなずいたのは、英語が聞き取れて、意味がわかってうなずいただけ」

僕の言葉に彼女は、目を大きく開いて、残念そうにしたけど、
「そうですか……私の方こそ、早とちりしてごめんなさい」

そう言つて謝ってくれた。しゅん、と小さくなつた彼女をそのままにして置けなくて、僕は口を開いた。

「きみのおじいちゃんも、覚えてないの？」

もしかしたら、という思いでそう聞いた。

「……おじいちゃんは、先月、亡くなりました」

「え……あ……ごめん」

軽く口にしたこと、後悔した。

少し考えれば、おじいちゃんがすでに亡くなっていることぐらい予想できた。彼女の写真を眺める雰囲気や、語り口からだつてわかつたはずだし、第一、おじいちゃんに聞けるのなら、一番に聞いているに決まつてる。聞いてわからなかったか、聞けなかったからこそ、僕なんかに頼っているんだ。

そのどっちにしろ、掘り返されてうれしい類のものでないことくらい簡単に想像はつく。

「いえ。いいんです。気にしないでください」

彼女はうつすらと微笑みながらそう言った。

「生前、おじいちゃんと約束したんです。それを果たすために、一人で日本まで来たんですけど、肝心のその場所がわからなくて……」
エヘヘ、と力なく笑い、彼女はうつむいた。その目元にはうつすらと涙が浮かんで見える。

すごいな、と素直に思った。

だって、アメリカだぜ？ アメリカ。世界で一番広い海、太平洋の向こう側から飛行機で片道七時間ぐらい。チケット代や滞在費を考えたら何十万とかかる。そんなところから、目的地もはっきりわからないのに、死んだおじいちゃんとの約束を果たすために、日本に来たんだ。

それは、すごいことだと思う。

僕には、そんなこと出来ない。約束の場所がわからないのに、それを果たすために、見ず知らずの土地に行って、現地で写真一枚を手がかりに探すなんて。

外国人ってなんかオーバーだし、ポジティブだし、不安に思ったりしないから、そういうこと出来ちゃうのかなあ……なんて思ったけど。そんなわけない。それは今の彼女を見ていればわかる。

不安に押しつぶされそうで、怖くて泣きたくてたまらない。それを必死にこらえている彼女を見れば。

怖くて当たり前だ。外国人とか、そんなこと関係ないのだ。

知らない場所で目的地を見失ったら誰だって怖い。いや、知ってる土地ですら迷子になるのは怖いのだ。それを乗り越えて、日本まで来た。彼女はその不安を、太平洋というでっかい境ごと乗り越えてやってきたのだ。

どうにかしてあげたい　そう思っちゃうだろ。

外国人ってだけで不安になって逃げ腰になった僕には、多分、彼女みたいに行動することは出来ない。それでも、だからこそ、そんな行動が出来る彼女の手助けをしてあげたいのだ。

「よし、探そう！」

僕はベンチから立ち上がると、彼女に向かってそう呼びかけた。

「え？　でも……」

「大丈夫！　オレ、この辺には詳しいし。神社にも詳しいし！　桜も好きだから！」

この辺に詳しいのと桜が好きなのは本当だけど、神社に詳しいというのは真っ赤なうそだ。とにかく彼女を励ましたくて思いつくままに言葉を並べる。

「それに、きみだって、いろいろ回ればその場所のこと思い出すかもしれないし。大丈夫だよ」

ね、と笑いかける。

「一緒に探そう」

僕は彼女に手を差し出した。彼女は驚いたように目を丸くして、
「は、はい！」
ぎゅっと僕の手をつかんで立ち上がると、にっこりと笑った。
こうして僕たちの、思い出の場所探しが始まった。

3

「うーん……写真以外の手がかりは何もないんだよね？ 地名とか……」
探そう、と意気込んだはいいものの、写真以外の手がかりがない
僕らは、結局まだベンチに座ったままだった。

「……はい」

彼女は申し訳なさそうにうなずいた。

「手がかりはこの写真だけしかなくて……」

僕は彼女からもう一度さっきの写真を見せてもらった。あらため
てじっくりと見て見るが、そこに写っているのは神社の境内と大き
な桜の木。それからおじいちゃんと小さいソフィ。

この写真を最初に見たとき懐かしい気がしたから、あらためてじ
っくり見れば知ってる場所なんじゃないかと思ったけど……わから
なかった。

神社の名前が書いてないかと見てみるが、残念なことに書いてな
い。桜の向こうには青空が見えるから、ここが他よりも高い場所だ
ということにはわかるけど……神社って結構、他よりも一段高い場所
にあったりするからなあ。

結局、手がかりになりそうなのは、神社と大きな桜の木。その二
つだけ。

とりあえず、このまま座っていても仕方ない。

「近くのそれっぽい神社をまわってみよう。そうしている間に、そ

の場所を思い出すかもしれないし」

よっとベンチから立ち上がった僕は、彼女に写真を返してそう言った。

「は、はい」

「あ、そのままでもいいよ」

立ち上がろうとした彼女を制する。

「徒歩でまわるのは大変だし、自転車もってくるから待っててよ」

そう言っ、さっきとめたばかりの自転車を駐輪場から持ってきた。

「二人乗りつてしたことある？」

僕の質問に彼女は首を横に振った。

「で、でも。知ってはいます」

ローマの休日とか……あこがれました。目を輝かせて彼女はうれしそうに笑った。

「そっか、それじゃあ、どうぞ」

僕は自転車にまたがって荷台をポンポンと叩いた。……生憎、ベスパじゃなくて、ただの自転車だけ。そう笑いながら。

「し、失礼します」

彼女は恐る恐る、自転車の荷台に女の子座りで腰かけた。不慣れでびくびくと震えているのが、とても初々しい。

そんな風に澄ましたように見せかけて、内心僕はドキドキだった。

……彼女が二人乗り初めてだって言っただけ、僕だって初めてなのだ。女の子と二人乗りなんて。

「よ、よし。行くよ」

「はい」

僕が声をかけると、彼女はぎゅっと僕の腰に手をまわした。軽く添えるようなその手がわき腹の敏感な部分にちょうど当たって、僕はもうたまらなかった。

それでも、ぐいっと力を入れてペダルを漕ぎ出した。

とりあえず、近くの神社を目指すために。

このときのサイクリングは、人生で一番幸せな時間だった。二人乗りをしているのに、ペダルはいつもよりも軽くてどこまでも漕げる気がした。きっと僕の自転車も金髪美少女を乗せることが出来て喜んでいるんだろう。

それにしても、自転車を漕いでいるだけで、まさかこんなに幸せを感じることが出来るとは……彼女を後ろに乗せて走りながら僕は心底そう思った。

世にいるたくさんのカップルが二人乗りをするわけを今日はじめてしっかりと理解したよ。

カタン

「キャ」

ぎゅっ。むぎゅっ。ふにふに。

小さな段差を乗り越え、車体が軽く揺れ、彼女が僕に強く抱きついた。

彼女は初めての二人乗りを怖がって、僕の腰にしっかりと腕をまわしてしがみついていた。そして、今みたいに小さな衝撃のたびに悲鳴を上げ、ぎゅっと抱きついてくるのだ。

ここまで言えばわかるだろ？

そのたびに、彼女の豊満なおっぱいが僕の背中に押し付けられて押しつぶされたおっぱいがもにゅもにゅと形を変えて僕の背中をマッサージ。さらに必死に僕にしがみつく彼女は、息をちよつと荒くしていて、ハアハアしていて……すんげえ、えろい。

世のカップルは、これを堪能するために二人乗りしてるんだな、と僕はしみじみと思った。

ガタン

「んっ」

ぎゅっ。もにゅ。むにゃむにゃ。

たまにあえぎ声まで混ざるからもうたまらん！僕はいつでも昇

天できる。イエス、おっぱい！ カタン、カタン、カタン。

「キヤ、アンツ、ああん、ダメッ」

むぎゅう、ぎゅうぎゅう。むにゃもにゅ。

僕はそんな彼女の声を背に、一心不乱にペダルを漕ぐ。

「あ、あのっ……んっ……もっと……ゆっくり……っ」

「ああ……ごめんごめん」

「んっ……こわい……、もっと、っ……やさしく……くっ、……して」

ああ。彼女の表情を見れないのがとても残念です。っていうか、もしかして意識してセリフを選んだりしてないよね彼女？

実は僕はさつきからわざとでこぼこ道を選んで走っていたんだが（ホント、ごめんなさい）。それもそろそろおしまいにした方がよさそうだ。

……なぜって？ それは……ほら……アレだ。彼女が怖がつてるから。うん。そう。おっぱいの感触がなんだかだん申し訳ないし。身体が火照ってもうどうしようもないし。……僕が本当に昇天しかねないからじゃないよ。決して。火照ってるのは自転車漕いでるからだからね？ ……ふう。

最寄の神社に到着した。この神社はこの辺では一番大きく、桜がきれいなことで有名で、今の時期、休日はお花見客でにぎわっている。幸い今日は平日なので、そんなに人はいない。

ここは僕も毎年初詣に来るからよく知っていて、写真の場所がここではないことはわかっていたけど、神社と言われてすぐに思いついたのはここしかなかったのだ。

彼女が思い出すきっかけにでもなればいいと思ってきたけど、神社の関係者に聞けば、写真の神社を知っているかもしれない。

適当なところに自転車をとめて、鳥居をくぐり境内へと入ろうとしたとき、不意に彼女が立ち止まった。ボケーっと空を見上げてい

る。

「どうしたの？」

「これは何ですか？」

彼女は鳥居を見つめて言った。

「それは鳥居っていう……神社の門かな？」

「トリイ……」

彼女はそうつぶやくと、目を細めて鳥居を見つめた。

「……何か思い出した？」

いいえ、と彼女は首を横に振った。

「日本に来たんだな、って」

そう言っただけのように笑った。

「いまさらなんですけど……私、日本に来たんだって思ってた」

彼女はそうつぶやくと、神社の境内を興味深そうにゆっくりと見回した。

そんな彼女を見ていたら、不意に涙がこみ上げてきた。

彼女は今まで、そうとう緊張していたんだろう。日本に来た、ということを感じる余裕もないぐらいに。彼女があまりにも自然な日本語で話すから忘れそうになるが、彼女が日本を訪れるのは二度目なのだ。それも、前のことはほとんど覚えてないから、初めてのようなものだろう。

……それなのに、今まで、日本に来たことを実感してなかったって。

こみ上げてくる涙をこらえながら、僕はひとつのことを決意した。

なんとしても、写真の場所を見つけよう。そしてそれだけじゃ

なくて、日本を楽しんでもらおう。僕はそう決意した。

「どうしたんですか？」

突然涙ぐんだ僕に彼女は心配そうに聞いてきた。

「なんでもない、なんでもないよ……中へ行こうか」

涙をぬぐった僕は彼女をうながして、神社の中へと入っていった。

「……不思議な感じですね」

神社の中に入ると彼女はそう言った。

「なんだか、空気が違う気がします……あ！ あれは何ですか？」
そう言って彼女が指差したものは、狛犬だった。

「あれは、狛犬って言うて……神社の番犬みたいなもの……ですよ」
あってるよね？ だいたい、あってる？

「変な顔ですね。どうして左右で顔が違うんですか？」

「……個性、じゃないかな」

「そうなんですか」

「ごめん、適当なこといいました」

狛犬が左右で顔が違うとか、僕も今、気がついたし。

彼女は目に付くもの一つ一つについて尋ねてきた。

「あれは？」

「あれは、お参りするときに、手とか口をすぐするためのものだよ」

「オマイリ？」

「ええと……神社とかお寺で、神様を拝むこと、だと思う」

「……ふーん？」

彼女はわかったような、わからないようなうなずき方をした。：

……さつきから僕は何もまともに説明出来てない。

彼女に日本を楽しんでもらおう、と決意したくせに、僕は日本のことについてちゃんと知らなかった。聞かれても答えられないことばかりだ。

そんな知識なんて普段使うことないからいいじゃん、と今までは思っていたけど、今は、なんだか無性に恥ずかしく、彼女にうまく説明できないことが悔しかった。……これからは、日本文化についてちゃんと勉強しよう。そう強く思った。

この神社は当然、写真の場所ではなかった。境内の掃除をしている人に聞いて見たが、知ってる人はいなかった。彼女も何かを思い出した様子はなく、仕方なく次の神社へ行こうと思ったとき、彼女

が僕に声をかけた。

「あの……オマイリって私にも出来ますか？」

「ん？ うん。誰でも出来るよ。せっかく来たんだし、お参りして
こうか」

ついでだし、と何気なく僕はそう提案したのだが、

「はい！」

彼女はともうれしそうに、おっぱいがたわむぐらい、うれしそうに大きくうなずいた。……そっか、日本人にとっては別に楽しむようなことじゃなくても、彼女にとっては違うんだ。そんな当たり前のことを僕は思い知った。

手水舎（チヨウズヤと言うのだと境内にいた人に教えてもらった）で、手と口をすすぐ。彼女が口をすすぐときに、手からこぼれた水が、おっぱいの谷間へとこぼれた。ヒヤン、と彼女は声を上げて、それを拭ったのだが、そのときのたまみかたが、もう！僕は鼻から暖かいものが垂れるのを感じた。

そんなやりとりをはさみつつ、社殿（これも教えてもらった）へと行き、賽銭箱へと五円を投げ入れた。

「それは？」

「お賽銭、っていつて……なんだろ。神様に願いをかなえてください、ってお願いして、そのお願いの気持ちとか感謝の気持ちとか、それをあらわすもの、かな」

「日本の神様は、お金を払うと願いをかなえてくれるんですか？」

「うーん……そういうわけじゃないけど」

でも、そう思ってしまう気持ちもわからなくはない。

「……日本人は、叶ったらいいな、って思ってるけど、本当に神様が願い事を叶えてくれるとは思ってないんだ、きつと。でも、少しだけ期待してるから……とか。うーん。なんだろ。神様に話を聞いてもらうための対価、とか……でも、そんなに深く考えてない気がする」

結局のところ、今の日本人はさほど神仏を信じてはいないのだ。

気休めとか、儀礼とかそのためのお参りだから、お賽銭にも、特別思い入れがあるわけじゃない。その微妙なさじ加減が、伝わるだろうか？

「たくさんお金をあげた人が、叶えてもらえるというわけではないんですね」

「うん。たくさんしたほうが、叶いそうな気はするけど、一緒だね」「なぜ、五円を入れたのですか？」

「御縁がありますように、って……字は違うけど、漢字が同じだから。まあ、なんていうか、いいことが、ありますように、って」

「そうなんです。じゃあ、私も」

お賽銭を投げ込み、鈴をジャラジャラと鳴らした。鈴の意味も聞かれたけど、そっちはさっぱりわからなかった。きっと家のチャイムのようなものだよ、と答えてく。

二回礼をして、二回手を打つ。

神様、どうかこの子にあの写真の場所、教えてやってください。お願いします！　どうか、おじいちゃんとの約束が果たせますように！

手を合わせて僕はそう祈った。最後にもう一度礼をして頭を上げると、隣では彼女も僕のまねをして、同じようにお参りをしていた。金髪の外国人が、お賽銭を投げてお参りをしている光景というのは、横で見ていると不思議な気分だった。……日本の神様って外国人の願いでも聞いてくれるのかな？　唐突にそう思った。いや、四分の一は日本人の血なのだから聞いてくれるだろ。きっと。

「行こうか」

お参りを終えた彼女にそう言って、歩き出した僕は、ふと、真っ白でふわふわとした、あるものを目にした。おっぱいじゃない。おみくじだ。一本の木にたくさんのおみくじが結ばれていた。

「運試し、していかない？」

「はい？」

不思議そうに木を眺めていた彼女は僕の言葉に首をかしげた。

「あれ、おみくじって言って、占いみたいなものなんだ。今日のこれからを占ってみようよ」

そう言って彼女と、おみくじ売り場へ行き、係りのおじさんに言っておみくじを引かせてもらう。ここのおみくじは、八角形の筒を振って、出てきた棒に書いてある番号のものを受け取る、という方式のちよつと雰囲気のあるやつだ。

僕が十七番、彼女は二十一番だった。

結果は。

「小吉……か」

微妙なものを引いてしまった。……探し物、いずれ見つかる。辛抱強く耐えよ。待ち人、にわかには来ぬ、気長に待て。……全体的にしばらく耐えなさいってことか。

「どうだった？」

「ええと、漢字が読めなくて」

どれどれ、と彼女のおみくじを覗き込むと……末吉。これもまた微妙な。……探し物、すぐには見つからない。地道に探せ。待ち人すでに現れている。計画的に自ら動け。じきに叶う。……計画的にしない、ということが全体的に書いてあった。にしても、恋愛で計画的について……探し物も、すぐには見つからない、か。

末吉に小吉って、幸先悪いなあ。

「どうですか？」

そう尋ねる彼女に、全部をそのまま読んだ。本当は適当によさそうな方向に改変しようとも思ったのだが、全部の漢字がわからないというわけでもないみたいなので、下手に変えるよりもそのままの方がいいと思った。……伝える内容変えても、おみくじの内容は変わらないしね。

「……そうですか……計画的に……」

それを聞いた彼女も、ちよつと困ったように笑った。

「まあ、あくまで占いだからね。当たるも八卦、当たらずも八卦、ってね。どうする、これ。結んでく？」

木を指して聞く。

「結ぶと、悪い結果はよくなる、って言われてたりもするんだけど」

「……結ばなくてもかまわないんですか？」

「うん。どっちでも、同じかな。お守りとか記念にもってる人もたくさんいるよ」

じゃあ、と言って彼女はそのおみくじを丁寧にお財布にしまった。僕も記念にと、財布にしまっておく。

そのおみくじをしまったお財布を見つめ、彼女はやわらかく微笑んでいた。……結果はいまいちだったけど、喜んでくれたみたいでよかった。

僕たちは次の神社へ向かうために、その神社をあとにした。

「ここも……違うか」

「……はい」

写真の場所の手がかりは、一向につかめなかった。

六つの神社を回ったが、どれもはずれ。最初は、ものめずらしさにテンションの高かった彼女だけど、神社なんてどこも似たようなものだし、手がかりもまったくなくて、徐々に静かになってしまった。僕の日本を楽しんでもらおうという作戦もいまいちだ。

またもはずれだった、七つ目の神社をあとにしようと、自転車まで戻る。すでに市内を二周した。二人乗りでこれだけ回ったせいか、僕の太ももはパンパンだった。身体の疲れも結構きている。

そろそろきついし、次でいったんお昼にしようか、と思いながら足をさすりつつ、自転車にまたがる。

「よし、じゃあ次は」

彼女に声をかけよとした僕は、彼女が荷台に乗らないことに気づいた。彼女は自転車の隣に立ったままうつむいて、写真を見つめている。

「……どうしたの？」

トイレ？　なら、近くにコンビニがあったけど。そう聞くと彼女

はちよつと恥ずかしそうに違つと首を振つた。聞きながらも僕は、そうではないだろうことに気づいていた。

そりゃ、わかるさ。これだけ回つて手がかりがゼロだ。落ち込みもする。

「次ぎまわつたら、お昼に」

「……もう、いいです」

僕の声さえぎつて、彼女はそう言った。

「え？ もういいって？」

「もう、探さなくて……いいです」

もういい、という言葉は予想外だった。その瞬間は意味がつかめないほど。

「え？ なんで……」

僕の言葉に、彼女は顔を上げ、力なく笑つて答えた。

「写真一枚を頼りに探すなんて、最初から無理だったんです……それが、わかりました」

その笑顔に、僕は何も言うことが出来なかった。

「こんなに探しているのに、何も見つからない。何も思い出せない……もう、いいんです」

「そんな……でも」

とつさに口を開いたが、それ以上何かを言うことは出来なかった。「シユウも、疲れたでしょう？ 迷惑をかけてごめんなさい……だから、もう、いいんです」

これ以上、迷惑をかけられません、と彼女は言った。

「そんなことない」

「いえ……いいえ！」

何をバカな、と思つて口を開いたけど、最後まで言うことが出来なかった。彼女が僕の言葉をさえぎり、首を横に激しく振ったからだ。

「それに……それに！」

力なく首を振つて言つと彼女は、一度口をつぐみ、

「あなたにはこんなによくしてもらっているのに……迷惑をかけるだけで、なにも思い出せなくて……私は、それが一番いやなんです」
もう一度開いてそう言うと、深々と頭を下げた。

何を言ってるんだ、この子は。

「もう、いいんです。おじいちゃんとの約束は、もういいんです」

泣きそうな顔でそんなことを言うのだ。絶対に、よくない顔で。

「いいわけ、ないだろ」

気づいたら口が勝手に動いていた。

「いいわけ、ないじゃんかよ！ そんなの！」

気づいたら、大声で怒鳴っていた。

「何だよ！ 約束のためだけに、わざわざ日本まで来たんだろ！
？ 太平洋越えてきたんだろ！？ すげえ不安でも、それ越えてきたんだろ！？ それを、なんで、なんでこんなところでやめちゃうんだよ！ 絶対によくない！ きみだつて、よくないって顔してるじゃんかよ！ なんになんで」

「I do not want to be seemed by
you a trouble! I seem by you
that it is a trouble, and do
not want to be disliked me！」

彼女は突然、英語で叫んだ。だから、僕には彼女がなんて言ったのかまったくわからなかった。

「……私は、シユウに嫌われたいくないです」

最初きょんとした僕は、彼女の言葉に、顔がにやけそうになった。

彼女が英語でなんて言ったのかはわからない。それでも、最後に言った日本語だけで十分だった。

バカ、と言いたかった。無性に顔がにやけてしまった。いや、わかってる。彼女がそういうつもりで言ったんじゃないってことはわかってる。彼女はただ「日本で初めて親しくなった人」である僕に嫌われたいってただだ。わかってる。でも、それをわかつ

ていても……にやけるのはとめられない。僕に嫌われたくないから、あきらめる、なんて、そんなことをこんなかわいい子に言われてにやけないなんて無理だ。

「それぐらいでいやになったりしないよ」

だから探そう、と僕はにやけそうな顔を破顔させて、安心させるような笑顔で告げた。

「でも……私、胸、大きいですし……」

「は？」

「に、日本人の友達に聞きました！ 日本の男性は、小さい胸と身体の子が好きだって……それに、外国人はカタコトじゃないと許せないって」

尻すばみでごによごによとそういう彼女の言葉を僕は半分しか聞いていなかった。

日本人は小さい胸が好き。大きいのは嫌い　おっぱいが大きいから、僕が彼女を嫌いになる。

その言葉は僕の逆鱗に触れた。触れてしまった。ふつつと僕の中のマグマが沸騰していった。

おいおいおいおい、誰だ誰だ、そんなことを言ったやつは。日本人は貧乳好きのロリコンで巨乳は嫌いで15歳以上はババア？　ふざけるなよ？　ふざけるな、ふざけるなッ

「ふざけるなあああ　　！！」

僕は吼えていた。自転車を蹴飛ばし立ち上がり、獣のような雄たけびを上げた。あまりの怒りで我を忘れていた。

「オレが、大きいおっぱいだから嫌いになる！？　バカにするのもいい加減にしろおおおお！！」

怒りで我を忘れた僕は、大声で叫んだ。

「そんな理由で嫌いになるわけないだろうがぁ！　オレを勝手に決め付けるんじゃない！　オレは、迷惑だなんて思っちゃいねえよ

！！これっぽっちも思っちゃいねえ！カタコトかどうかなんて気にしねえ！！」

はあ、はあ、はあ、と息を切らしながら僕は、キツと彼女を見据えた。

「オレは、おまえのこと、すげえって思った。アメリカから写真一枚を手がかりに、日本に来るなんて、そんなことオレには怖くて出来ないよ。それをやっちゃうおまえの力になりたいって思ったんだよ！おまえの願いを叶えてやりたいって思ったんだよ！わかるか！？だから、オレが、そんなくだらない理由で迷惑に思ったり、嫌ったりするなんてことは絶対じゃない！第一、オレは」

大きく息を吸い込んで、僕は吼えた。町じゅうに轟くような音量で。

「オレはあああ、大きいおっぱいがあああ、大イ好キイダアアアアアアア　！！」

空気がうわんうわんと振動した。神社の御神木がざわざわとざわめいた。

言い切った。思いのたけ全てをドンとぶつけてやった。全てを吐き出した瞬間、僕の頭はクールダウン……あ、あああ……やっちゃった。

彼女はそんな僕を、ポカンと見つめていた。そして我に変えるとあわてて両腕で胸元を覆い隠した。……ああ、うあああうあああくあswでrfgtひゅじこ1p。

終わった。これは完全に終わった。僕がどんな目で彼女のおっぱいをみつめていたのかがばれてしまった。ああ、終わりだ。アレだな。警察かな。アメリカ人だもんな、裁判起こされるのかな……うああ。

「……………えっち」

絶望に打ちひしがれる僕に、彼女はちいさくそう言った。下をむいたまま、僕は「ごめんなさい」とつぶやいた。

「……………今いったことは、本当ですか？」

じーっと見つめる彼女の視線が僕のハートに突き刺さる。頭を下
げたまま僕は答えた。

「……本当です」

いまさらうそだ、と言っても仕方が無い。何より自分のソウルの
シャウトにうそはつけない。

「……………」

「……………」

視線が痛い。無言なのがなおさら痛い。……うつう……あうう……

あれ、少しずつ気持ちよくなってきたかも？ そう思った瞬間、
その痛い視線がふっと途切れた。

「……………もう」

まったく、と彼女はつぶやいた。……僕は新しい目覚めを迎えず
に済んだことと、視線が和らいだことにほっとした。

「顔を上げてください」

「はい……っあいうえお!？」

顔を上げると、目の前に彼女のおっぱいがあった。鼻先一寸ぐら
い。僕の息が吹きかかるほど近く。彼女が大きく息を吸い込んだだ
けでふれそうな距離。

「おおきいおっぱいが好きなんですか？」

腕を組んで、胸を挟み込んで持ち上げるようにしながら、彼女は
僕に言った。真っ赤にした顔を横に向けて。

「……は、はい」

僕は荒れ狂いそんな本能を、目を閉じることで必死に押さえ込ん
で答えた。

「……さわりたいですか？」

「っ……………」

挑発的なその言葉に反応しそんなマイサンを前屈みになって必死
に押さえつける。

「わかりました」

そう言っていると彼女は僕から離れた。はあああ……知らないうちに止

めてしまっていた息を吐き出す。

「この写真の場所を、探すのを伝ってください。そして、私をそこまで連れて行ってください」

いまさら何を言い出すんだ、と思った僕に彼女は続けた。

「……もしも、連れて行ってくれたら……そのときは……すきに、してくれても……いいです」

「え……えええ!？」

彼女の突然の申し出に、僕は頭が真っピンク、もとい、真っ白になった。

「探すのを、手伝ってくださいですか？」

「……う、うん で、でも 」

とつさに、よろこんで! と言つのをこらえたことを誰か褒めていいかけた僕の言葉を彼女がさえぎる。

「ちゃんと連れて行ってくれたら、ですからね。それまではえっちな目で見えることも禁止です」

うなずいた僕に彼女は一步だけ近づいて、

「改めて、よろしくお願いします」

彼女はほほを真っ赤にしながら、僕に手を差し出した。

「よろしく」

声が裏返らないよう、かまないように気をつけながら、僕はその手を握り返し、約束の場所に着くまでは紳士的な目でみつめようと心に誓った。

「じゃあ、さっそく行きましょう、はい、これお願いします」

そう言つと、ソフィは背負っていたリュックサックを僕に渡した。

「それを背負っていてください」

「ああ……はい」

僕はソフィのリュックサックを背負うと、倒れた自転車を起こしてまたがった。ソフィは荷台に乗ると、僕の腰に腕をまわした。…

…うん、これでもう、おっぱいは当たらないね……うん。

多少意気消沈しつつも、なんだかんだで僕はうれしかった。いや、

正しく胸を揉む権利を得ることが出来たからではなくて。そうじゃなくて、なんか、こう　いや、やっぱりやめておこう。なんだか言葉にすると変わってしまう気がするから。だから　僕は、おっぱいを正しく揉む権利を得たことで、踊りだしそうなほど喜んだ。

「じゃあ、行くよ」

そう言っただけで走り出した。次はこの神社へ行こうか、そう思いながら桜並木の道を走る。前方の山にも一箇所だけ桜が咲いているのが見えた。後ろには、今までいた神社の桜と、ソフィ。

左も右も前も後ろも、僕の気持ちも、全部が桜色に染まっていた。
「あっ！」

突然、ソフィが声を上げた。

「シュ、シュウ……わ、私」

「どうしたの？」

トイレ？　と聞いた瞬間、頭をスパンと思い切りはたかれた。……さっきまでよりも、遠慮がなくなっただけで、とてもいいことだと思う。

「お、思いだしちゃった……写真の場所」

4

はあ、はあ、はあ。

僕たちは、山を登っていた。

ソフィの思い出した、約束の場所。それは僕らの前方にある、山の中腹にある神社だった。

ちょうど僕が見た、一箇所だけ桜の咲いていた場所、あれが、その場所だった。

もっとも、ソフィは山ではなく、リュックを背負う僕の背中を見て思い出したのだが。……このリュックはもともとおじいさんの物

で、一緒に日本に来たときにおじいさんが背負っていたそうだ。

そして、それを背負う僕の後姿にかつてのおじいさんの姿を重ね、唐突に思い出したらしい。

ソフィにそう言われた瞬間、僕も思い出した。

そうだ、この山は前に登った。……高校入学直後の遠足でこの山の頂上まで登らされたのだ。その途中に、確かに神社があった。そこで僕はお昼ご飯を食べたんだ。

場所のわかった僕たちは、駅まで戻った。

その山はハイキングするのに有名で、駅から直通のバスが出ているのを僕は知っていた。遠足の時も、そのバスをつかったからだ。

そして、バスに乗り込み、山を登りはじめ一時間

「シュウ、大丈夫？」

後ろを歩くソフィが僕に声をかけてきた。

「うん、大丈夫。ソフィは？」

大丈夫、と言いながらも僕の足元はふらついていた。ソフィのリユックは意外と重く、自転車を漕いでパンパンになった足に、この登山はけっこうきつかった。

「All right. 大丈夫、もう少しだもの」

そういうソフィもつらそうだった。だけど僕たちは、足を止めずにひたすら登った。

そして。

「……ついた」

浅間神社、と書いてあった鳥居をくぐる、風に乗せられて桜の花びらが、小さな社殿の向こうからこちらへ舞い踊る。

僕たちは、社殿の裏へとまわった。

そこに、写真の場所があった。

この神社に一本だけ生えた、大きな桜の木。その向うには、少し赤らみ始めた空。

「ここ……間違いない」

ソフィは写真を取り出し、カメラを置いたであろう場所に立って、

そう言った。彼女の目には、涙がにじんでいた。

「……おじいちゃんとの約束は、果たせそう？」

僕の問いに彼女はこくんとうなずくと、

「シュウ、リュックを貸して」

そう言った。言われて僕は、背負っていたリュックをソフィに渡す。ソフィはリュックを開けると、そこから折りたたみ式のスコップを取り出した。……どうりで重いわけだ。

「それで、どうするの？」

僕が聞くと、ソフィはまっすぐにこちらを見つめて、言った。

「おじいちゃんを、埋めるの」

ソフィは、スコップで桜の根元を掘り出した。ザク、ザク、ザク。ソフィが地面を掘るのを、僕は見つめることしか出来なかった。

手を出してはいけない気がした。ザク、ザク、ザク　カッソ。

スコップが何か固いものに当たり、金属音が響いた。

ソフィはそのまわりを、丁寧に掘り、ぶつかつたものを掘り出した。

それは、ブリキの缶だった。何かのお菓子の箱か、そのぐらいの大きさの。それを取り出した彼女は、ゆっくりと地面に置いた。

ソフィはその缶のふたをゆっくりとあける。ギチギチ、と音が鳴った。その中から出てきたのは、小さなビンと、小さな箱と、一枚の紙。

ソフィは、それをひっくり返したふたの上に丁寧に並べると、その紙を開いた。それは、手紙のようだった。彼女はそれをひざの上に広げて読み出した。

「……ッ」

ボタボタ、と紙の上に涙がこぼれた。ソフィの涙が。ボタボタ、ボタボタ。

「……ッ、んく……っ……ヒッ」

ソフィがその手紙をひざの上に置いた、その瞬間、強い風が吹いて、その紙が彼女の手をすり抜けて宙を舞った。

「あっ」

つい、僕は声を上げた。

ソフィは涙をぬぐいもせず、手紙を拾いにいこうともせず、動かなかった。あわてて僕は手紙をつかむと、ソフィに駆け寄った。

「これ」

「……あ」

僕に言われてはじめて手紙が風に飛ばされたことに気づいたソフィは、

「シュウ……シュウ！」

僕に、抱きついた。

「うっうっうっ……ん……っく……ひっく……うっうっう……ああああああん」

そのまま、ソフィは大声で泣き出した。わんわん、わんわんと。僕はどうしたらいいのかわからなくて、戸惑っていたが、ゆっくりと彼女の背中に手をまわして、ぎゅっと抱きしめた。

「ああああ……うっうん……ひっく……うっ……うあああ」

泣き続けるソフィを抱きしめながら、その手紙に目を通す。だけど、その手紙は英語で書かれていて、僕には読むことは出来なかった。

ソフィが泣きやむまで僕は、ずっとその背中を抱きしめ続けた。抱きしめたまま動くことが出来なかった。

「ありがとう……ありがとう、シュウ」

呼ばれて初めて動けた僕は、ゆっくりとソフィの横にひざをついた。彼女はブリキの缶を手元に寄せて、小さなビンを手にとった。中には何か白い欠片が入っている。

「……それは？」

「……これはね、昔ここに来たときにおじいちゃんが埋めたもの……おばあちゃんの骨」

そして、ソフィは話しをはじめた。彼女のおじいさんと、おばあさんが出会ったときの話しを。

「おじいちゃんとおばあちゃんが出会ったのは、戦争が始まる前だったんだって。おばあちゃんは、アメリカ商人の娘で、おじいちゃんはその商品運び入れる業者の人だったんだって。そこで二人はお互いを好きになったんだけど、身分の差とか、国の差で、人目のつくところでは会えなかったんだって。それで、二人がよく会っていたのが……ここ」

そう言うと、ソフィは桜の木をやさしく撫でた。

「この桜の木はね、おばあちゃんのお屋敷にあったものから分けたんだって。戦争が始まる直前、おばあちゃんがアメリカに帰ってしまうときに。お互いの無事と、いつかの再会を誓って。……ううん、逢えなくても、二人がここにいた証に、って」

こんなに大きくなったんだよ、っておじいちゃんが言っていたの。とソフィは笑った。

「そのとき、二人はもう会えないと思っていたんだって。でも、戦争が終わった後、また会うことが出来た。それで、二人は駆け落ち同然で結婚したの」

ソフィの持った写真を見る。そこに写るおじいさんからは。そんな話とても想像が出来ない。ものすごくドラマティックなおじいさんだ。

「それでね、おばあちゃんが亡くなったときに、ここに骨を埋めたの。それで、おじいちゃんはそのときに私に、お願いをしてた……自分が死んだら、骨の一部をおばあちゃんと同じところに埋めてくれ、って」

ソフィは、リュックからひとつのビンを取り出した。それにも白く小さな欠片が入っていた……おじいさんの骨だろう。それをソフ

イはおばあさんの骨の横に並べた。

「家族の誰も、そんなこと聞いてなかったから、私が言い出したときには反対したわ。……おばあちゃんが日本に埋まつてることも知らなかったし。それでも私はどうしてもその約束を果たしたくて……それで、三日間だけという約束で日本に来たの。お父さんの出張にあわせて」

今日が三日目だったから、本当によかった……ソフィはそうつぶやいた。

「おじいちゃん、急に死んじゃったから、その場所の手がかりも何もなくて……遺品を整理してようやくこの写真と、昔行つた駅の名前だけ見つけたの」

そうなんだ、と僕はつぶやいた。

「見つからないと思つてた……たつた三日で、何も手がかりがなかったから……本当に無理だと思つてた」

「よかったね」

「うん。シユウのおかげ。ありがとう。本当にありがとう」

ソフィはまたも泣きながら僕に抱きついてきた。おっぱいとかやわらかさとかなんとかもうわからなくて、僕も涙をこぼした。

「一緒に埋めてもらえる？」

「うん」

彼女に頼まれて、おじいさんとおばあさんの骨と一緒に埋めた。

埋め終わってから僕はひとつだけ残つた小箱に気づいた。

「これは？」

「ああ、これは……」

そう言つて彼女があけた小箱。その中に入っていたのは、指輪だった。

「おじいちゃんが、おばあちゃんにプロポーズしたときに渡した指輪だつて。小さいころにおばあちゃんに欲しいって、ダダをこねただけど……おじいちゃん覚えてたみたいで、私にくれるって。二人の形見として持つててくれたって」

手紙を僕に見せながら彼女はそう言った。

「そうなんだ」

その指輪は、シンプルでついてる宝石も大きくないけれど、きつとおじいさんの想いがつまったものだったんだろ。錆びた様子もなく、きれいに光っていた。

「そろそろ、帰ろっか」

「……うん」

僕たちは、夕日のきれいに輝く桜の舞い散るその場所をあとにした。

山を降りる間、ソフィはずっとしゃべっていた。きっと、ようやく全ての緊張から開放されたからだろう。学校のこと、家族のこと、友達のこと……たくさん話した。

今夜アメリカに帰るの？ と聞くと、そう、とソフィは答えた。時間は平気？ うん、すぐに新幹線に乗れば大丈夫。

バスを待ちながらうとうとするソフィとそんな話をした。バスに乗ったら寝ちゃっていいよ、ついたら起こすから。僕がそう言うのと、ソフィは、起きてる。寝ちゃったら起こして、絶対に。と僕に頼んだ。

そんなことを言っていたけど、ソフィはバスに乗るとすぐに寝てしまった。疲れがピークに達していたんだろ。

そしてソフィは今、僕の肩に頭を乗せて眠っている。クークーとかわいい寝息が聞こえる。……バスに乗る前に、寝たら起こしてと言われたけど……この寝顔を見ていると、起こすのが申し訳なく思えた。……それに、出来たらこの状態をもっと味わっていたかった。おっぱいがぶつかっているわけではないけど、ソフィの身体のやわらかさ、あたたかさが僕の身体に伝わってくる、時折ゆれる頭のかすぐったさが、僕の脳髓までくすぐる。

……いまさただけど、ソフィってすごくかわいい。肩に頭を置かれた今になってそんなことに気がついた。

ソフィの匂いやあたたかさを感じているうちに、僕もうつうつとしてきて　ソフィにもたれかかるように、僕も眠ってしまった。

5

駅につく直前に目を覚ました僕は、まだ寝ているソフィを起こした。ソフィは自分が寝てしまったことに気づくと、シヨックを受けて、

「どうして起こしてくれなかったの!？」

と激しく怒った。そんなに怒られると予想してなかった僕は戸惑って、

「ごめん、オレも寝ちゃって……」

「ウソ!　起こしてって頼んだのに!　シュウのバカ!」

バスを降りるとソフィはプイと僕に背中を向けて歩いていったしまった。

「ちよっと、ソフィ待ってよ。ごめんってば、ねえソフィ」

追いかけながら僕はソフィに呼びかける。でも、彼女は止まってくれない。

「待ってってば!」

少しいらだった僕は、彼女に追いつくと、その腕をつかんで強引に振り向かせた。

「何で、そんなに怒って」

僕はそこまで言っただけで、言葉を飲み込んだ。……ソフィの目には涙が浮かんでいたのだ。それが、ぼろぼろとこぼれる。

「え?　あ、ちよっと。なんで泣くの……え、ごめん、痛かった?」

あわててつかんだ腕を離す。

「バカ……バカバカバカ。シュウのバカ」

涙を流しながらソフィは僕の胸をぼんぼんと叩いた。

「すぐに帰るっていったのに……なんで起こしてくれなかったの……」

「え？」

僕がその言葉の意味をとるよりも早く、ソフィは続けた。

「もう知らない……シユウなんて知らない……」

そう言っただけで彼女は僕をよけて駅の改札へと走って行ってしまった。

僕はどうすればいいのかわからなくて、その場に立ち竦んでソフィを見つめた。

彼女は改札口でいったん立ち止まり、

「……バカ」

そうつぶやくと、あとは振り向きもしないで行ってしまった。

え、ちよつと、おい……待てよ。本当に行っちゃうの？ ウソだろ。おい……。

僕は冗談だろうと思ってその場に立ち止まっていたけれど彼女は本当に行ってしまった。改札の外からはもう見えなくなった。

なんだよ、もう！

改札の外からいくらのぞいても中は見えなくて、わけがわからなくて腹の立った僕は、きびすを返して帰ろうとして

「ふざけるなこのアマアア！」

怒鳴り声をあげて、ターン。改札に財布を叩きつけSuicaで通過。駅のホームを駆け抜ける。

「ソフィイイイ！」

人が振り返るのにかまわずに僕は叫んだ。そして走った。新幹線のホームめがけて一気に駆け抜ける。

僕が新幹線のホームへと駆け込んだとき、ちょうど新幹線がホームへと入ってきたところだった。

おいおい、駅に着いたらすぐ帰らなきゃ、とは聞いたけど、こんなにすぐなのかよ！ クソ！

「ソフィ！」

新幹線に乗り込もうとしていた彼女を見つけて叫んだ。その瞬間、

彼女の動きがぴたりと止まった。

「ソフィ」

荒い息を抑えて彼女に近づく。いいたいことはたくさんあった、けど、何一つとして言葉にならなくて、僕は口をパクパクさせた。

「……バカ」

そんな僕に背を向けたまま彼女は言った。

「シユウのバカ！ バカ、バカ、バカ…… もっとすぐに追いかけてよ」

「……ごめん」

うつむいて僕は謝った。

もう、彼女は行ってしまふのに、お別れなのに、何も言葉が出てこなかった。そう思えば思うほど、出てこなかった。

「シユウ」

彼女に何か言いたくて、顔を上げたのと、それは同時だった。

ぎゅつ。チュウウウウツ

僕の唇に、やわらかくてあたたかなものが強く押しつけられた。

それは僕の唇を挟むようについばみ、ゆっくりとなぞるように動いて。息がもつギリギリまで、ねっとり重なられたそれが、僕の唇からゆっくりと離れた。

「……ありがとう、本当にありがとう。……バイバイ」

発車の合図が鳴り響いて、彼女は新幹線に乗り込んだ。

僕は、ドアが閉まる瞬間まで動くことが出来ず、あ、と気づいたときにはすでにドアは閉まっていて。僕は新幹線のドアに、手を伸ばしたまま固まった。

そんな僕にソフィは、くすりと笑いながら手を振った。

新幹線が去った後も僕はそこに立ちすくんでいた。

彼女の濃厚なキスの余韻が、いつまでも残っていた。

あれから一ヶ月が過ぎた。

あのあと。ソフィと出会ったあの日のあと。

僕を待っていたのは、学校をサボったことに対する、教師と親からの雷だった。

でも、それも一日だけのこと。

そのあとに残ったのは、濃厚なキスの余韻だけ。ソフィとは連絡先もなにも交換していなかったから、お互いに連絡のとりようもない。第一、彼女がいるのは海の向こうだ。多分、もう二度と会うことはないのだろう。

ソフィとの出来事は、僕のとつての大切な思い出のページになって、永遠に僕の中に残る。そう、胸の奥にしまって、青春の思い出、ファーストキスの思い出として。わずか一日の、とても輝いたページとして。

そうなる、と思っていた。

僕はいつものように駅前の駐輪場に自転車を止め、駅のロータリーへと向かった。

駅前のロータリーに着いた瞬間、僕は足を止めた。

そこに、謎の少女がいた。

少女というか美少女で。謎の、というか外国人の女の子が。

あまりにも自己主張が強いおっぱいのために、胸元が強調されているデザインに見えるタンクトップに、ホットパンツを履いてその太ももを惜しげもなく晒した、金髪の美少女が、そこにいた。

美少女は、誰かを捜しているのだろうか、きよろきよろとあたりを見回したり、僕と同じ制服を着た生徒を捕まえては話しかけている。

足を止めたまま、僕は目を丸くして、彼女のことを見つめた。

「な、なんで……」

つぶやいた瞬間、ばちり、と彼女と目があつた。会ってしまった。
「シュウ！」

駆け寄ってきた金髪美少女が僕の首にぎゅっと腕を回して抱きつ
いた。

「なんで、ソフィがここに!？」

僕は驚きの声を上げた。

ま、まさか、僕に会いにわざわざ日本に来たのか!? そんな、
まさか 動揺する僕に、ソフィは、へへ、と笑っていた。

「私、日本に留学しにきたの。もっと日本のこと、知りたくて」

「そ、そっか」

だよな、そんなうまい話があるわけないよな。あはは、と笑いなが
らも落胆する僕から、ソフィは回していた腕を放して、一歩下が
った。

そして、顔を赤くして、小さな声でぼりつつぶやいた。

「それに……シュウとの約束、まだ果たしてなかったから」

顔を真っ赤にして上目遣いで、僕を見るソフィ。

「約、束? ……あ」

僕は思い出した。

ああ、そういえば……約束したっけ。もしも、写真の場所をちゃ
んと見つめられたら、そのときは

「シュウ、あの……」

「は、はい!」

僕はうろたえながら直立不動でビシツと返事をした。

「約束、だから……好きにしていよいよ?」

ソフィは胸の下で腕を組んで、強調するようにソレを持ち上げた。
かあぁと僕の顔が真っ赤になるのがわかった。はち切れそうなほ
ど、血液が体内を駆け巡っていた。

「でも……でも……その……責任、とってね?」

顔を真っ赤にして、いたずらっぽくソフィは笑った。

くらくら、とめまいがした。全身が火照って、熱を帯びてしょうがなかった。

もしかしたら、僕はまた、病気になってしまったのかもしれない……いや、多分すでにかかっていたんだ。彼女と出会ったあのときから。彼女と過ごしたほんのわずかの一日の間に、それはもうどうしようもないぐらいかかってしまっていたんだ。

そう、恋の病、というやつに。

F i n .

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9220z/>

金髪巨乳はお嫌いですか？

2011年12月28日21時47分発行